

キリシタン資料における「じあい(慈愛)」について

漆崎 正人

一 はじめに

キリシタン資料において、「あい(愛)」は、一般に、〈感情的肉体的な愛情〉を意味する語として使われていると捉えられている^{※1}。

しかし、『日葡辞書』(1603-4年)には、「あい」を構成要素に有する複合語の掲出項目の中に、見出し語の訓釈の一部「アイシ」に対してポルトガル語 Amor が対応していたり、「じん(仁)」の項目の例文に、「自ラヲ忘^{ミツカ}し、他ヲ愛^{ツス}シテ」とあることから、

「愛する」が漢語「愛」に当る広い意味を持ち得た事、儒教風な意味をも持ち得た事が知られるのである(「愛」と amor の対応にも注意。amor は「大切」に対応するのみではない。^{※2})とする見解もあり、キリシタン資料における「あい」に関しては、まだなお検討すべきことが存している。

筆者は、以前、この問題について、「あい」を構成要素に有する複合語——以下、単に「愛の複合語」と呼ぶ——のありようの具体的な解析として、キリシタン資料における「おんあい(恩愛)」を取り上げ、考察した。「おんあい」は、仏教的価値観からすれ

ば、妄執であり、その点で、「あいす」との類義性を有する「愛の複合語」の一種であることが期待されるころではあるが、「おんあい」の語釈に「たいせつ(大切)」が引き当てられていることもあり、むしろ、「たいせつ」との類義性の方が強く、キリスト教の信仰に支障がない場面などにおいては、肯定的な文脈において用いられており、他の「愛の複合語」とは、かなり異なった特徴を有することを明らかにした。^{※3}

そこで、本稿では、今回「愛の複合語」の一つである「じあい(慈愛)」を取り上げ、キリシタン資料における、この語のありようを検討することにする。

なお、ローマ字本のキリシタン資料からの引用に際しては、ローマ字を適宣漢字仮名交りに直すことがある。

二 キリシタン資料における「じあい」に関する先学の見解

キリシタン資料における「じあい」に関して、何らかの指摘があるものは非常に少ない。

以前にも取り上げたように、^{※4}小島幸枝氏は、キリスト教的愛の

日本語訳として「あい(愛)」が用いられずに、「こたいせつ(御大切)」「たいせつ(大切)」が考え出された理由を推測した箇所、『日葡辞書』の各項目の語釈に基づき、「あい」が訳語として適さないことの根拠となる「愛の複合語」を列挙している。当時の既存の日本語を見ると、

まず『日葡辞書』で「愛スル」を「快樂を与えるものを樂しむ」としているように、愛の熟語もまた、「愛慕・愛敬・愛執・愛著・愛寵・愛念……」および「遺愛・恩愛・敬愛・最愛・慈愛・憎愛・寵愛・貧愛・人愛……」(『落葉集』1598刊による)など、その語釈に見る如く、精神的な愛よりはむしろ肉的快乐な愛のニュアンスが強ク、キリスト教的愛の訳語としては不適當であったこと、かつ、その他の日本語の中にも相互愛の概念を有するものは見付け難く、意味上、的確に対応する訳語を認め難かったことにもよう。

と述べ、「じあい」は、「あい」がキリスト教的愛の日本語訳として相応しくないことの根拠として、「精神的な愛よりむしろ肉的快乐な愛のニュアンスが強」ところの、「愛の複合語」の一つと扱われている。もつとも、「じあい」自体の『日葡辞書』の具体的な語釈には触れられていない。小島氏は、フーベルト・チーシリク氏の、「愛の熟語も、感情的な快樂もしくは不潔な快樂を表わしている」との見解をほぼ受け継いでいると見られる。

次に、『ロザリオ記録』(1622年刊)に存する「慈愛」に対

して、その翻字本の『ロザリオ記録』(1986年刊・平河出版社)の三橋健氏・宮本義男氏の註では、

慈愛 やさしさと愛情でかわいがること。「プティジャン」は「御大切深く」に作る。

とある。この「慈愛」の語釈は、その妥当性はさておき、『日葡辞書』(1980年刊・岩波書店)の「じあい(慈愛)」の項目で示されているところの、

Itaiジアイ(慈愛) Itucuximi aitsuru.(慈しみ愛する) 非常なやさしさと愛情でかわいがること。

の「非常なやさしさと愛情でかわいがること」という語義から、「やさしさ」に付されている「非常な」という修飾語を取り除いただけのものであるから、『邦訳日葡辞書』の「じあい」の項目の語義をほぼ踏襲していると言うことができる。一方、この註で言及されている「プティジャン」とは、『ロザリオ記録』と『ロザリオの経』(1623年刊)とを取り合わせた改修本の『玫瑰花冠記録』(1869年刊)を指すが、それでは、「慈愛」に対応する箇所が、「御大切」となっているという指摘も注意される。プティジャン師は、当該の「慈愛」の文脈の意味を、「御大切」に置き換えられるものと見做していることになる。

次に、主な国語辞典・古語辞典の中で、使用例の典拠を示して、「じあい」を立項しているのは、『日本国語大辞典 第二版』第六卷(2001年刊・小学館)(以下、『日国』と呼ぶ)、『時代別国語

大辞典 室町時代編』第三卷(1994年刊・三省堂)(以下、『室町』と呼ぶ)に限られていると思われる。「じあい」は、『日国』、『室町』には、それぞれ、次のように掲載されている。

じあい【慈愛】『名』 親が自分の子どもに対するような深い愛。また、そういう愛の気持でやさしくいたわること。

*菅家文章(900頃)三・路遇白頭翁「貞観末年元慶始、政無^二慈愛^一」法多^レ偏^一」*神皇正統記(1339-43)上・武烈「上古の聖賢は、子なれども慈愛におぼれず、器にあらざれば伝ふることなし」*謡曲・老松(430頃)「諸木の中に松梅は、ことに天神の、ご慈愛にて、紅梅殿も、老松も、みな末社と現じ給へり」*日葡辞書(1603-04)

「[ia](ジアイ)。イツクシミ、アイスル」*夢酔独言(1843)「親の為には孝道を専らにして、妻子にはじあいし」*運命論者(1903)〈国木田独歩〉三「其言葉は少ないが、慈愛(ジアイ)に満て居たのです」*礼記―樂記「寛裕肉好順成和動之音作、而民慈愛」[釋音]〈標ア〉[〇]〔京ア〕[〇]〔辞書文明・日葡・書言・言海・表記慈愛(文・書・言)〕

じあい(慈愛) 神仏・親など上の立場にある人が、自らの庇護の下にある者を大きな愛情をもってつつむこと。「慈愛」(広本節用)「慈愛」(落葉)「[ia](ジアイ)」。「慈シミ愛スル」。非常な情と愛をもってかわいがること(日葡)「牧ハヤシナウトヨムゾ。ソノ州ノ民ヲ子ノヤウニ思テ、ナデハダケ

養育シテ慈愛スルゾ」(玉塵四十)「贊^二魚監観音^一丹臉青鬘慈愛深、自疑雲雨夢中心」(狂雲集上)

『日国』で掲出の最後の用例が『礼記』であることから明らかのように、「じあい」は漢籍由来の漢語であり、仏教語としての用例は挙げられていない。『日国』によれば、「じあい」の国内文献の初出は九〇〇年頃のものであり、以降今日まで用いられていることが示されているが、語義は最初に置かれている「親が自分の子どもに対するような深い愛。また、そういう愛の気持でやさしくいたわること。」という意義で通時的に一貫しているという解釈である。本稿との関わりで言えば、この語義が、キリシタン資料における「じあい」の意義として妥当なものであるかどうかの問題となるわけであるが、それについては、次節での検討の中で扱うことになるとして、ここでは、『日葡辞書』の用例の挙げ方が不十分であることを指摘しておく。『日国』では、『日葡辞書』から、「ジアイ」の項目の記述のうち、ポルトガル語訳の部分を除き、訓注部分の引用で止めているけれども、見出し語の訓注が常に見出し語の語訳にもなっているとは限らないので、ポルトガル語訳のところまで引く必要がある。とりわけ、この見出し語の場合、グイツクシミ、アイスル”という訓注の「アイスル」は、キリシタン資料においては、抜いに慎重を要する語である。今日の「あいする(愛する)」の語義をそのまま当て嵌めて理解するわけにはいかならない以上、ポルトガル語訳の部分まで引用しないの

は不適切であったことになる。

『室町』では、語義は、「神仏・親など上の立場にある人が、自らの庇護の下にある人を大きな愛情をもってつつむこと。」とし、「じあい」の作用の主体として、「親」のほかに、「神仏」が指定され、しかも、「親」よりも先に挙げられていることにより、最も代表的な作用の主体を、「神仏」という絶対的な存在と捉えていると見られる。さらに、作用の方向について、上位から下位へという一方向的であることを明示し、具体的に踏み込んだ語義となっている。ただ、この項目の用例には、「仏」が作用の主体であるものは挙がっていない。なお、用例として引かれている『日葡辞書』の「ジアイ」の項目の日本語訳は、『邦訳日葡辞書』のものとはやや異なっている。それについても、次節での検討で扱うことになる。

三 キリシタン資料に存する「じあい(慈愛)」の検討

キリシタン資料には「じあい」の用例は極めて少ない。したがって、その一つ一つを取り上げ、検討することにする。

まず、『日国』と『室町』で掲載されている、『日葡辞書』から見ていく。『日葡辞書』には、「ジアイ」は、次のようにある。

Iai. Iqucuxini aisuru. A mimar com grãde affeito. ϕ amor.

『邦訳日葡辞書』と『室町』で「じあい」の項目の日本語訳とし

て問題となるのは、*mimar. affeito. amor* の三語である。これら三語について、『現代ポルトガル語辞典』(1996年刊・白水社)で、それぞれ対応する項目の掲載内容を挙げる。

- mimar.* (中略) ㊦①愛撫する、かわいがる、甘やかす、寵愛(ちようあい)する。②身ぶり(手まね)で表現する。
affeto. (中略) ㊦①「+a+paralcoml・porに對する」愛情、好感、友情。『nutrir um grande』por...に對する大きな愛情(友情)を育む。ter affeto a (por)...に愛情を抱く。
 ②感情。③愛情。(友情)の對象。『Doi-me estar ausente do meu』私は愛する人から離れているのが苦痛だった。
amor (中略) ㊦①愛、愛情。『〜ao (do) próximo 隣人愛。〜a (da) patria 祖国愛。〜conjugal 夫婦愛。〜filial 親に對する子供の愛情、孝心。〜maternal(materno) 母性愛。〜paternal(paterno) 父性愛。②「時に㊦ 男女間の」愛、恋、恋愛。『estar louco de』恋で夢中になっている。〜a primeira vista 一目ぼれ。〜carnal(físico) 肉体的な愛。〜livre 自由恋愛。〜passageiro かりそめの恋、浮気。〜pl-atónico プラトニック・ラブ。casamento de 恋愛結婚。
 ③es de infância 幼年時代の恋愛。④「時に㊦ 情事、アバンチュール。『ter(trazer)』es com+人...と男女關係を持つている。④「事物に對する」愛好、情熱。『〜a verdade 真理を求める情熱。〜ao jogo ばくち好き。com 情熱的

に、熱心に。⑤〔時に園〕愛する人(物)。『Coragen, meu ~』
 ねえあなた、勇気を出して！⑥《ブ、口語》とてもきれいな人(物)、とてもよい人(物)。⑦〔A ~〕愛の神キューピッド Cupido: [A ~ es] ビーナスとキューピッドに仕える愛の神々。⑧〔動物の〕交尾欲。

となる。これら三語のうち、『邦訳日葡辞書』と『室町』とで日本語訳に違いがあるのは、*affetto* と *amor* であるが、*affetto* については、『邦訳日葡辞書』では、*やさしさ*、と訳し、『室町』では、“情”と訳している。『室町』は②、『邦訳日葡辞書』は①の類義的解釈と見做される。*amor* については、『邦訳日葡辞書』は、“愛情”、“室町”は“愛”で、それぞれ、訳出している。“愛情”も“愛”も、①の範疇に入るが、キリスト教的視点に立つと、“愛情”は感情であり、“愛”は意志ということになり、区別されるべき意義と判断される。そもそも、類義性を有する *affetto* と *amor* を併置しているのは、併置することで、両語の意味を互いに区別しようとしていると考えるのが合理的である。すなわち、*affetto* は、感情としての“愛情”、*amor* の方は、意志としての“愛”を表わしていると解することができる。そうすると、*minar* は、感情と意志との両方を含む語が相応しいことになる。『邦訳日葡辞書』、『室町』では、ともに、“かわいがる”を当てているが、これは、ほぼ感情に基づく行為を指しがちだから、訳語として適切とは言えないので、上位者から下位者へという方向性のある“か

わいがる”と類義性を有しつつ、意志に基づく行為を指し得る、“いくしむ”が適していると思われる。そこで、本稿では、『日葡辞書』の“ジアイ”の項目は、次のように訳すべきだと考える。

Itai. Itucuximi aisuru. A minar com grãde affetto. $\text{\textcircled{A}}$ amor.

(訳：慈愛。慈シミ愛スル。大きな愛情や愛で“いくしむこと”。)

次に、『落葉集』(1598年刊)には、「本篇」に、

○慈あはれ愛は母……(五丁表)

とあるが、音訓の付記のみである。ちなみに、『落葉集』の成立に影響を与えたと思しい「節用集」類その他の古辞書には、管見の範囲では、『文明本節用集』(室町中期写)には、「シ」部に、

○慈悲イソクシヤクシヤム愛アイ……(熊藝門)

とあるほかに、

慈愛ジアイ〔弘治二年本節用集〕室町末期写「シ」部「言語進退」門)

慈悲ジヒ愛アイ〔永祿二年本節用集〕1565年以降写「シ」部「言語進退」門)

語)門)

慈悲ジヒ愛アイ〔堯空本節用集〕1565年以降写「シ」部「言語進退」門)

慈愛ジアイ〔枳園本節用集〕室町末期写「シ」部「言語進退」門)

慈愛ジアイ〔永祿五年本節用集〕1568年奥書写本の影写「シ」部「言語進退」門)

語)門)

慈愛ジアイ〔慶長五年本節用集〕1600年写「シ」部「言語進退」門)

慈愛ジアイ〔経亮本節用集〕1565年以降写「シ」部「言語進退」門)

慈愛ジアイ〔塵芥〕1510 ~ 50年頃成立「シ」部「熊藝」門)

などと存する。「節用集」類では、伊勢本系統の増刊本類に属するとされる『文明本節用集』を除けば、印度本系統の諸本のうちの数本にのみ「じあい」の登載が認められる。「節用集」類以外の古辞書で掲載が確認できたのは、「韻書乃至は韻事の書」とされる『塵芥』だけである。

次に、『朗詠雑筆』(1600年刊)には、『雑筆抄』に一例、

○誠神妙也能々可被慈愛

と、「慈愛」が使われている。この漢文は、「誠(まこと)に神妙(しんみょうなり)也。能(よ)く(く)慈愛(じあい)せ(せ)被(ま)る(る)可(こ)し(し)。」と訓読されるところであるが、後半の「能々可被慈愛」は、読み手自身がわが身を労ることを書き手が請う内容になっている。既に見てきたように、『日国』や『室町』や『日葡辞書』で掲載する「じあい(慈愛)」の語義には、『雑筆抄』の「慈愛」に適合する意義は見出しがたい。キリシタン版『雑筆抄』は、『雑筆抄』の系統分類では、前段後段を有する第二類のうち、前段の部分が第一類第二種の『宗町本雑筆抄』と同系の第二類第二種に属する一本であるとされているが、実は、同種の諸本(『類従本雑筆往来』、『東大本雑筆抄』、『神宮文庫本雑筆抄』、『真如藏旧蔵本雑筆抄』)では、当該の「慈愛」は、すべて「自愛」となっていると指摘されているのである。「じあい(自愛)」については、『日葡辞書』にも項目がある。

Iai Mizucara aisuru. A mimar & mostrar amor. (訳: 自愛)

自ラ愛スル。じあひしむこと、また愛を表わすこと。

『邦訳日葡辞書』や『室町』で引用されている『日葡辞書』では、それぞれ、次のように日本語訳している。

Iai. ジアイ(自愛) Mizucara aisuru(自ら愛する) かわいがつ

て愛情を示すこと。

Iai. (ジアイ)。「自ラ愛スル」。かわいがつて愛を示すこと。

たしかに、『日葡辞書』の誤訳によれば、「じあい(慈愛)」と「じあい(自愛)」とは類義的ではあるものの、「じあい(慈愛)」におけるいつくしみの源が、大きな愛や愛情であることが明示されているのに、「じあい(自愛)」の方は、そのような指定がなく、そういう意味で汎用的であるから、その行為の主体と対象が同一の場合も成り立ち得るが、「じあい(慈愛)」の場合は、行為の主体と対象が同一ではなく、別々であるのが自然である。当該の「慈愛」は、むしろ「自愛」である方が、整合的と判断される。キリシタン版『雑筆抄』の同類同種の他本すべてが「自愛」となっているのは、他本の方に問題があるのではなく、キリシタン版『雑筆抄』の「慈愛」表記の方が本文として極めて疑わしいわけである。「じあい(自愛)」に関しては、『日国』や『室町』ばかりでなく、『小学館古語大辞典』(1983年刊・小学館)(以下、『小学』と呼ぶ)、『角川古語大辞典』第三卷(1987年刊・角川書店)(以下、『角川』と呼ぶ)にも掲載されている。『日国』、『室町』、『小学』、『角川』における記載内容は、それぞれ、次のとおりです。

じーあい【自愛】《名》①自分を大切にすること。自分の体

に気をつけること。現代では、「御自愛」の形で、手紙の末文などで相手に向けて用いることが多い。*家伝(160頃)上(寧楽遺文)「入_二吾堂_一者、无_二如_三宗我大郎_一、但公神識奇相、実勝_二此人_一、願深自愛」*明衡往来(11C中か)下本「彌端_二勁心_一可_レ被_二持_三奉公之節_一也、自_二愛玉躰_一、不_レ可_レ混_二風塵之客_一」*釈氏往来(12C後)五月日「自愛之処差_二専使_一、投_二芳札_一」*読本・椿説弓張月(1807-11)拾遺・四七回「彼山路は、洋腸として樹たち深く、熟(なれ)たる者も路に迷(まど)ふ事あり。日毒蛇猛獣も亦多かり。よく自愛(ジアイ)し給へ」*日本外史(1827)一・源氏前記「平治之變、信頼義朝之猖獗、吾而自愛、事未_レ可_レ知」*小学読本(1884)〈若林虎三郎〉五「嚴寒の時節尊体御自愛專一に被遊候」*老子一七二「聖人自知不_二自見_一、自愛不_二自責_一」②品行をつつしむこと。自重すること。*椿葉記(1434)「年来の本望達して自愛の処に」*史記一平準書「人人自愛、而重_二犯_一法」③(形動)人や物を大事にすること。珍重すること。また、それに値するさま。*江都督納言願文集(平安後)三・奉造立六尺皆金色觀世音菩薩像一体「位列_二二品_一唐白氏猶自愛」*古今著聞集(1254)一一・三九六「件僧、人のいさかひして、腰刀にて突合ひたるを書きて、自愛してゐたりけるを」*源平盛衰記(14C前)一四・木下馬事「武士

の宝には、能き馬に過ぎたる物なにかは有るべきとて、あだにも引き出だすことなければ、木の下と云ふ名を附けて、自愛(ジアイ)して飼ひける程に」*井蛙抄(1362-64頃)六「員外後学一言を自愛せられける、まことの数奇人と覺ておもしろく侍りき」*明德記(1392-93頃か)上「奥州天下の望は元來心にかけて給しうへ、自愛の智のすすめ成ければ」*中華若木詩抄(1520頃)下「吾もよく生長したれば、一段深きぞ。言語道斷、自愛なる風景也」④自分の利益をはかること。利己。*日本開化小史(1877-82)〈田口卯吉〉五・一〇「蓋し人の天性は自愛に切にして他愛に疎なるものなり」⑤自己保存の自然の感情。この感情が、他人への愛の根底にあるとする見方と、他愛と別個であるとする見方がある。*哲学字彙(1881)「Self-love 自愛」*竹沢先生と云ふ人(1924-25)〈長与善郎〉竹沢先生と虚空・五「それはどこ迄も『自己愛の反映としての愛』、『自愛の一部』であつて」発音〈標ア〉回〈京ア〉回 辞書文明・天正・黒本易林・日葡・書言・ハボン・言海 表記自愛(文・天・黒・易・書・ハ・言)

じあい「自愛」自愛(易林節用)「自愛_{兼能}」(和漢通用)「自愛」(落葉)①自らの身を大切に思つて、むちやをせず大事に扱うこと。相手のその身を思ひやうつていう語。「能自愛セヨト云語アリ。吾トモ吾身ヲ愛シテ、身モチリヨウ

ジニスルナノ心ゾ」(謡抄)。「汝又改三素心、以賦新律。其智随日而長、其祐逐時而亨。善加自愛」(碧山日録長編四)②その人自身の、特別に好きこのみ、目をかけてかわいがる対象であること。特に、目上の人の行為についていう。「Hai(ジアイ)。「自ラ愛スル」。かわいがって愛を示すこと」(日葡)「斎以後菓子者、生菓：覆盆子、百合草、随御自愛」可「用」之」(文明十四年鈔庭訓往来精)「自愛ト云ハ、御好物ニ随テ可「用」之也」(前田本庭訓往来抄)「奥州天下の望は元來心にかけ給しうへ、自愛の智のすゝめ成ければ」(明德記)「諸木の中に松梅は、ことに天神の御自愛にて、紅梅殿も老松も皆末社と現じたまへり」(光悦本謡老松)「自愛 トリワケ御寵愛ノ木ト云心ゾ」(謡抄)③当面の状況を、我が意になつたものとして満足し喜ぶこと。「言語道断、自愛ナル風景也」(中華若木抄四)「仙洞勅許子細なくて四月十六日宣下せらる。年来の本望達して自愛の処に」(三稿本椿葉記)「今日宗祇法師來。古今切紙、源氏三ヶ事等面授、自愛々々」(実隆公記長巻并)

じーあい【自愛】〔名・自サ変・他サ変・形動ナリ活〕①自らその身を大切にすること。「但し公は神識奇相、実に此の人に勝る。願はくは深く——せよ」(家伝・上)。「且つ毒蛇猛獸も亦多かり。よく——し給へ」(読・椿説弓

張月・四七)。②物を重んじ愛すること。「弘高聞きて——しけり」(著聞集・画図)。「木の下といふ名を付けて——して飼ひける程に」(盛衰記・一四・木下馬)。「言語道断、——なる風景なり」(中華若木詩抄・下)。「ジアイ(Hai)かわいがつて、愛情を表す」(日葡辞書)

じあい【自愛】〔自)愛(ジアイ)「易林本節用」□名・動サ変①漢語。①わが身を大切にすること。用心すること。書簡文に用いることが多い。「玉躰を自愛、風塵之客を混す可からず」(雲州消息・下本)「且、毒蛇猛獸も亦多かり。よく自愛し給へ」(弓張月拾遺・四七)②みずからその言動を慎むこと。自重。「年来の本望(立親王ノ事)達して自愛の処に：仙洞より内々うけ給はる子細ありて、七月に出家を遂ぬ」(椿葉記)②人や物を大切にすること。たいそうかわいがること。「件の僧、人のいさかひして、腰刀にて突合ひたるを書きて、自愛してゐたりけるを」(著聞・一一)「奥州天下の望は元來心にかけ給しうへ、自愛の智のすゝめ成ければ」(明德記・上)□形動ナリたいそう気に入るさま。「興ありて面白ほどに、帰らんことをも又打忘れたるぞ。昔もよく生長したれば一段深きぞ。言語道断自愛なる風景也」(中華若木詩抄・下)

キリシタン版『雑筆抄』の当該の「慈愛」は、これらの辞典において、「じあい(自愛)」の項目の、『日国』の①、『室町』の①、

『小学』の①、『角川』の□①④に、それぞれ合致する。しかも、『室町』の①の用例として引かれている『謡抄』(1595～1600年頃)「老松」の「能自愛セヨ」という表現は、当該「慈愛」の「能(よ)能(く)慈愛(せ)被(む)可(く)可(し)」とほぼ同じ文脈であることや、そもそも、「雑筆往来」の別名であるところの『雑筆抄』が、書簡用文集の「往来もの」であって、前掲の辞典の中には、該当語義の説明で、「じあい(自愛)」が書簡文に多いという指摘もあることなどから、当該の「慈愛」は、書簡文でよく見られる「自愛」の誤と解し、「じあい(慈愛)」の例とは認めないのが妥当である。次に、『ひですの径』(1611年刊)には、「御作の物を以て世と稱(せう)し奉る御作者と其御善徳を見知り奉るの經卷第一」の「第八水大の事」に、「じあい(慈愛)」が一例用いられている。

則人を御子の如く思召す御大切の故也然ば人はかゝる御慈愛を顧て御作者を崇敬し奉らざるべからず(二四丁表)

「御作者」とは、『日葡辞書』の「サクシヤ(作者)」の項目に、

Sacuxa. Tãucuru mono. *Official ou homẽ que faz algũa obra.*

『Item, Poeta que faz bem hũs versos que charãõ, Renga, I'rengu. Item, Homem que tem boa traça, ou inuençaõ no

que faz. 『Gosacuxa. Criador: palaura que corre na Igreja.

(訳：作者、作者、職人、あるいは、何か工作品を作る人。

『また、連歌、または、連句と呼ばれている詩を上手に作る詩人。』また、物を作るに関しての良い構想、あるいは、

巧みな工夫をもっている人。『御作者。創造主。教会において通用していることば。』

とあるように、キリスト教用語で創造主、すなわち、神を指す。かゝる御慈愛とは、御作者である神(神)が人を御子の如く思召す御大切のことにほかならず、かゝる御慈愛の「かゝる」の具体的な内容が、(神が)人を御子の如く思召すことである以上、当該の「御慈愛」は「御大切」の同義的表現として使われていることは疑いない。『日葡辞書』の「たいせつ(大切)」の項目は、

Taixet. Amor. 『Taixetni moyuru. Arder em amor. 『Taixetuo tãucusu. Amar sũtamente, ou mostrar grande amor,

『agasalhado. 『Taixetni zonzurulyomõ. Amar. (訳：大切。

愛。『大切ニ燃ユル。愛に燃える。』大切ヲ尽ス。この上なく愛する、あるいは、大きな愛や厚遇を表わすこと。』大切ニ存スル、または、思フ。愛する。)

とあり、項目の対訳には、本来多義的な amor のみで示されているのは、キリスト教的立場では、意志としての「愛」という意味が紛れもなく amor の第一義であるという認識に基づいて考えられる。項目の説明によれば「大切ヲ尽ス」ことは「grande amor」(大きな愛)でもって為される行為であるという点で、『日葡辞書』の、「ジアイ(慈愛)」の項目で説明されている「慈愛」と共通しており、『ひですの径』において、「御大切」と「御慈愛

が同義語に使用されているのは、極めて自然なことである。

次に、『コンテムツス・ムンヂ』（1596年刊）には、巻第三の「第九。デウスノ御前ニオイテワガ身ヲ卑シク思ヒ取ルベキ事」に、「じあい（慈愛）」が一例存する。

如何ニワガデウス尊マレ給ヘ、(中略) 御身ノ氣高ク量リナキ御慈悲ヲ以テ御恩賞ヲ思ヒ知ラザル者ニモ、又ハ御身ヨリ如何ニモ速ザカリタル者ニモ gojia ヲ尽シ給フ事絶工間ナシ。(二七五ページ)

当該例は、ローマ字表記のため、「ゴジアイ（御自愛）」、「ゴジアイ（御慈愛）」の両語の可能性があるが、文脈的には、絶対的な存在のデウスの、人々との関わり方を讀める表現中で用いられているので、使われ方は、『ひですの経』の「御慈愛」と同様である。したがって、当該例は、「ごたいせつ（御大切）」と同義的な「ゴジアイ（御慈愛）」と解するのが自然である。

次に、『ロザリオ記録』（1623年刊）には、「第六。此ノ尊キコフラデアノ御定メノ事。是代々ノパツパサントノ御納得ヲ以テ徹シ置キ給フ条々ナリ。」に、「じあい（す）」が一例見える。

尊キロザリオノコフラデアハ高下ノ差別無ク万民ヲ三シ給フ ビルゼン サンタ マリアヘ対シ奉リテノ興行ナレバ、(二八ページ)

当該例もローマ字表記のため、「ジアイ（自愛）」、「ジアイ（慈愛）」の可能性を考えなければならないが、文脈的には、聖母マリアの、

万民への対し方を賞讃する表現において、「ジアイシ」が使われているから、主体はテウスに準ずるといふことで、「ごたいせつ」に同義的な「ジアイ（慈愛）」と解して差し支えなかるう。なお、『ロザリオの記録』と『ロザリオの経』との改修本である『玫瑰花冠記録』では、本節での引用部分は、

玫瑰經の組は高下の差別なく萬民に御大切深く在す尊き童身聖瑪利亜に對し奉りし事なれば(巻第一一九)

となっており、「ジアイ（慈愛）」を含む表現を、「御大切」を含む表現に書き換えている。これは、キリシタン資料では、あまり使用されていない「ジアイ（慈愛）」を、プティジャン師は読解を容易にするために、同義的でキリシタン資料ではよく用いられている「ごたいせつ」に書き換えたものと思われる。

四 おわりに

以上、一般にキリスト教的な愛とは相容れないとされている、「あい（愛）」を構成要素にもつ複合語の一つ「じあい（慈愛）」について、キリシタン資料における、そのありようを検討してきた。

キリシタン資料からは、「じあい（慈愛）」の用例は、僅か五例（各資料一例ずつ）しか見出せなかつた。他に、「じあい（自愛）」の誤と判断される「慈愛」を一例確認した。「じあい（慈愛）」の使

用例のあるキリシタン資料を成立年代順に挙げると、『コンテムツス・ムンヂ』、『落葉集』、『日葡辞書』、『ひですの経』、『ロザリオ記録』となる。表記のし方では、『落葉集』、『ひですの経』は漢字表記の「慈愛」、『コンテムツス・ムンヂ』、『日葡辞書』、『ロザリオの記録』は、ローマ字表記の *jaí* (Jaí) の二つに分かれる。ただし、『落葉集』は、振り仮名「じあい」付きの漢字表記であり、また、『日葡辞書』の例は、項目自体であるが、項目を掲げた後に、項目の訓釈「慈シミ愛スル^{アイ}」が添えられているので、漢字表記のし方を示したローマ字表記という方が適切である。

キリシタン資料に認められる「じあい(慈愛)」五例のうち、『落葉集』に関しては、「慈愛」に対しての音訓の付記のみで、語義や用法に直接継がる手掛りは存しないが、他の用例は、語義の記述や具体的な文脈を有しており、それらの吟味から、用例は僅少ながら、キリシタン資料上の語義や特徴が明らかになった。『日葡辞書』によれば、「じあい(慈愛)」は、感情や意志として、上位者が下位者を大きな愛情や愛で慈しむことを意味する語と受け取られていたと思われる。そして、『コンテムツス・ムンヂ』、『ひですの経』、『ロザリオの記録』の、それぞれの具体的な文脈における「じあい(慈愛)」のありようから、「ごじあい(御慈愛)」の形式で、デウスの、人々への愛を、「じあいす(慈愛す)」の形式で、聖母マリアの人々を愛する行為を、それぞれ表わすのに用いられており、キリシタン資料において、キリスト教的愛を表

わす語として多用されている「たいせつ(大切)」と強い同義性を有していることがわかった。

漢籍由来の漢語であると見られる「じあい(慈愛)」は、実は、仏教書にも、肯定的な〈愛〉の在り方として、例えば、『大智度論』第七十二に「愛は貧欲煩惱の心にして行ずべからず、當に慈愛の心を行ずべし。」とあるように用いられている。一方、国内の仏教関係の文献での「じあい(慈愛)」が稀なのは、日本では、特に中世以降、仏教的には「愛」が「排斥され超克されるべき煩惱」として取り扱われることが多く、「あい(愛)」の項目の「語誌」『日国』第一卷・二〇〇年刊・小学館、その立場では、「慈」が「悲」と結びついた「慈悲」は定着できたが、両立しがたいはずの「慈」と「愛」とが結びついた「慈愛」は受け入れにくかったからと思われる。古辞書において、「じあい(慈愛)」の掲載が、印度本系の「節用集」の「類」などに留まっているのは、そのあたりの事情を反映しているのかもしれない。漢詩などの作成に使用された『聚分韻略』の「文明辛丑版本」(1801年刊)には、

慈^{イタクミ} (卷一・八丁裏)

とあり、「慈」に「愛也」との注がある。これによれば、「慈愛」の漢詩における漢語としての用法は「慈」と「愛」は同義的であり、「慈愛」の熟字は同義を重ねて意義を認めたものということになる。『塵芥』における「じあい(慈愛)」の掲載は、この書が「韻書乃至は韻事の書」であることと関わっているように。漢語の「じ

あい(慈愛) 自体は、本来キリスト教的愛を表わす語として相応しいにもかかわらず、「愛」を否定的に捉える当時の一般的な状況において、「慈愛」の「愛」は、肯定的な意味であるがゆえに、むしろ控えめな使用に留まってしまったのではないだろうか。

注1 小島幸枝「ご大切」『岩波キリスト教辞典』(二〇〇二年刊・岩波書店)。

注2 大野透『『愛』『愛す』に就て』『国語学』一二六集・一九八一年九月。

注3 拙稿『キリシタン資料と『おんあい(恩愛)』—キリシタン資料における『あい(愛)』の一考察として—』(『藤女子大学国文学雑誌』第九三号・二〇一五年一月)。

注4 注3同書。

注5 「たいせつ(大切)」『講座日本語の語彙』第一〇巻一九八三年刊・明治書院。

注6 「キリシタン宗敎文学の靈性」『キリシタン文化研究会会報』第一八年第四号(一九七七年二月)、後に『キリシタン敎理書』(一九九三年刊・敎文館)に再録。

注7 安田章「塵芥開題」(『伊藤波分類体辭書 塵芥』)一九八八年再刊・臨川書店。

注8 土井忠生「倭漢朗詠集卷之上解題」『慶長五年耶穌会板倭漢朗詠集』(一九六四年刊・京都大学国文学会)

注9 注8同書。

注10 尾原悟編『コンテムツスムンヂ』(二〇〇二年刊・敎文館)では、「ご自愛」と翻字している。

注11 『望月仏敎大辞典』第一卷(一九三六年刊・世界聖典刊行協会)の「アイ 愛」の項目による。

注12 道元の『正法眼蔵』(一二三二—五三年成立)に、「行持下」、「菩提薩埵四攝法」に、それぞれ一例ずつ、「慈愛」が存する。祖師の慈愛は親子にもたくらべざれ。(『道元禪師全集』上巻・一九六九年刊・筑摩書房・一四二ページ)

愛語といふは、衆生をみるにまづ慈愛の心をおこし(同書・七六六ページ)

(うるしざきまさと/本学教授)